目次

第一講　演習問題(1)……p. 2
第二講　演習問題(2)……p. 12
第三講　演習問題(3)……p. 22
第四講　演習問題(4)……p. 32

第一講　演習問題(1)

一　次の文章を読んで、あとの設問に答えよ（なお、設問の都合で返り点・送り仮名を省いた箇所がある）。

余1少時聞ク、平陵ノ曹(さう)敞(しやうハ)、在(ありト)二呉章ノ門下一ニ。往往ニシテ好ンデ斥(そしル)二人ノ過一チヲ。以テ為シ二軽薄一ト、世人皆以テ為スレ2然リト。章ハ後ニ3為王莽(わうまう)所殺。人ノ無シレ有ル二4敢収葬スル者一。5弟子ハ皆更(かう)二易(えきシ)姓名一ヲ、以テ従フ二他師一ニ。敞ハ時ニ為リ二司(し)徒(と)掾(えん)一ト。独リ称シテ二呉章ノ弟子一ヲ、収二葬ス其ノ屍(しかばね)一ヲ。6方ニ知ル二7亮直ナル者ハ不レルヲレ見レ容レ二于冗輩ノ中一ニ矣。

（『西京雑記』）

（注）
○余――筆者の自称。
○平陵――地名。
○曹敞――人名。
○呉章――人名。儒学者。
○王莽――人名。前漢の平帝の死後、帝位を簒奪(さんだつ)し、新を建国した。
○更易――変える。
○司徒掾――官名。司徒という高官の下に属する。

○亮直――心が明らかで正しい。
○冗輩――おろかな者たち。

問一　傍線部１「少」、４「敢」、６「方」の読みを、送り仮名も含めてすべて現代仮名遣いのひらがなで記せ。

1＝

4＝

6＝

問二　傍線部２「然」の指し示す語を抜き出せ。

問三　傍線部３は「王莽の殺す所と為る」と読む。この読みにしたがって、返り点を付けよ（送り仮名は不要）。また、現代語訳せよ。

為 王 莽 所 殺 。

訳＝

問四　傍線部５「弟子皆更易姓名、以従他師」とあるが、「弟子」の取った行動の理由として最も適切なものを、次の①〜⑤の中から一つ選べ。

① 王莽から危害を加えられることを恐れたため。
② 王莽と曹敞の対立に巻き込まれたくなかったため。
③ 呉章が優れた学者ではなかったことがわかったため。
④ 曹敞のような思慮の浅い者と同列に扱われたくなかったため。
⑤ 王莽が帝となったら儒学は時代遅れの学問になるとあきらめたため。

問五　傍線部７「亮直者不見容于冗輩中」の解釈として最も適切なものを、次の①〜⑤の中から一つ選べ。

① 曹敞のような公明な者は、王莽のようなおろかな者には容認されない。
② 曹敞のような公明な者は、世間の凡人たちに理解されるものではない。
③ 曹敞のような公明な者は、呉章のような平凡な師には目をかけてもらえない。
④ 呉章のような公明な者は、曹敞のような愚直な人にしか評価されない。
⑤ 呉章のような公明な者は、おろかな弟子たちを容認することはない。

二　次の文章を読んで、後の問に答えなさい。（設問の都合上、返り点・送り仮名を省いた箇所がある。）

家庭之教又必原於朝廷之教。朝廷之教以【(1)】、則家庭之教亦以道徳。朝廷之教以名利、則家庭之教亦以名利。(2)嘗有友人問、建文時何多忠義。予曰、此父兄之教厳耳。友人問、何以知之。曰、(3)以朝廷之教知之。蓋当時朝廷之教甚厳。其子弟苟或居官而不肖、則累及父母、累及宗族。故孩提之時苟或不肖、則其父兄必変色而訓之。語曰、少成若天性、習慣如自然。積累既深、(4)所以居官之時、雖九死而靡悔也。

（陸世儀『思弁録』による）

注　名利……名誉と利益。　建文…明の年号。　累……巻き添え。
宗族……一族。　孩提……幼児。　変色……怒りのあまり表情を変えること。
語……ことわざ。　少成……幼少期に培われた性質。　積累……積み重ね。

問一　空欄(1)に入る語としてもっとも適当なものを次の中から選びなさい。

A　道徳　　B　名利　　C　忠義　　D　不肖　　E　自然

問二　傍線(2)「嘗」の読みを、送り仮名も含めて平仮名で書きなさい。（平仮名以外に何も書かないこと）

問三　傍線(3)「以朝廷之教知之。」の解釈としてもっとも適当なものを次の中から選びなさい。

A　朝廷の教えによって、このことを始めた。
B　朝廷が教えたら、このことが徹底される。
C　朝廷の教えによって、このことがわかる。
D　朝廷が教えたら、このことが理解される。
E　朝廷の教えによって、これが周知される。

問四　傍線(4)「所以居官之時、雖九死而靡悔也」は、「くわんにをるのとき、きうしすといへどもくいなきゆゑんなり」と読む。これに従って、「靡」字の下に付く返り点を書きなさい。（返り点以外に何も書かないこと）

靡

問五　本文の内容に合致するものを次の中からひとつ選びなさい。

Ａ　朝廷の教えも家庭の教えも、名利を重んじるような方向は望ましくない。
Ｂ　昔の朝廷は、家庭における教えを厳格に行うように、国民を教え導いた。
Ｃ　厳格な教えの結果、国民が不安なく生活できるならば、国家は安定する。
Ｄ　朝廷の教えのありかたは、家庭における教えに対して、強い関係がある。
Ｅ　朝廷の教えは、家庭における教えよりも大きい影響力を持つことはない。

三　次の漢文は、中国の戦国時代の孟嘗君の誕生と幼少のころの逸話である。これを読んで、あとの(1)〜(3)の問題に答えよ（設問の都合上、返り点・送り仮名を省いたところがある）。

薛（せつ）公ノ田嬰有リ二子四十余人一。其ノ賤妾ニ有リレ子、名ヅクレ文ト。文以テ二五月五日ヲ一生マル。嬰告ゲテ二其ノ母ニ一曰ハク、勿カレレ挙グルコト也。其ノ母窃カニ挙ゲテ生（やしな）フレ之ヲ。及ビレ長ズルニ、其ノ母因リテ二兄弟ニ一而見（まみ）エシム二其ノ子文ヲ於田嬰ニ一。田嬰怒リテ二其ノ母ヲ一曰ハク、吾令ム三汝ヲシテ去（す）テ二此ノ子ヲ一、而ルニ【A】生之、何ゾ也ト。文頓首シ、因リテ曰ハク、君所二-以不ルレ挙ゲ二五月ノ子ヲ一者、何ノ故ゾト。嬰曰ハク、五月子者、長（たけ）与レ戸斉シクバ、将ニ（すト）レ不ラント利ナラ二其ノ父母ニ一。文曰ハク、人生受クル二命ヲ於天ニ一乎、将（はた）受クル二命ヲ於戸ニ一邪ト。嬰黙然タリ。文曰ハク、必ズ受ケバ二命ヲ於天ニ一、君何ゾ憂ヘン焉。[1]必受二命於戸一、則可レ高二其戸一耳。誰カ能ク至ル者ゾト。嬰曰ハク、子休（や）メヨト矣。久シクシテレ之ヲ、嬰乃チ礼シレ文ヲ、使ム三主リレ家ヲ待セ二賓客ニ一。賓客日ニ進ミ、名声聞コユ二於諸侯ニ一。諸侯[2]皆使人請田嬰以文為太子、嬰許スレ之ヲ。嬰卒シテ而文果シテ代リテ立ツ二於薛ニ一。是レ為リ二孟嘗君一。

（『史記』孟嘗君伝による）

（注）薛公……薛国の王。　　頓首……頭を地に打ちつけて行う拝礼。

(1) 傍線部1「必受㆓命於戸㆒、則可㆑高㆓其戸㆒耳。」の解釈として最も適切なものを、次のイ～への中から一つ選べ。

イ　人の運命は戸口に左右されるものなので、その戸を高くしさえすればよいのです。

ロ　人の運命は戸口に左右されるものなので、その戸より背はきっと高くなるにちがいありません。

ハ　人の運命は戸口に左右されるものなので、その戸を立派にすることができるはずです。

ニ　人の運命が戸口に左右されるものであれば、その戸を高くしさえすればよいのです。

ホ　人の運命が戸口に左右されるものであれば、その戸より背はきっと高くなるにちがいありません。

へ　人の運命が戸口に左右されるものであれば、その戸を立派にすることができるはずです。

(2) 空欄 A に入る語として最も適切なものを、次のイ～ホの中から一つ選べ。

イ　必　　ロ　将　　ハ　敢　　ニ　当　　ホ　未

(3)　傍線部２「皆使人請田嬰以文為太子」を訓読したときの返り点として最も適切なものを、次のイ～ホの中から一つ選べ。

イ　皆使㆔人請㆓田嬰以㆒㆑文為㆓太子㆒

ロ　皆使㆑人請㆓田嬰㆒以㆔文為㆓太子㆒

ハ　皆使㆑人請㆓田嬰㆒以文為㆓太子㆒

ニ　皆使㆘人請㆓田嬰以㆒㆑文為㆗太子㆖

ホ　皆使㆘人請㆓田嬰㆒以㆑文為㆗太子㆖

模範解答

第一講

〔模範解答〕

一

問一　1 わかき　4 あえて　6 まさに　問二　軽薄

問三　為二王莽所レ殺　（訳）王莽に殺される　問四　①　問五　②

二

問一　A　問二　かつて　問三　C　問四　靡上レ　問五　D

三

(1) ニ　(2) ハ　(3) ホ

〔現代語訳〕

一

私は若い時に聞いた、「平陵の曹敞は、呉章の弟子であった」と。（曹敞は）しばしば好んで人の過ちを糾弾した。（ある人が曹敞を）軽薄だとみなしたが、世間の人も皆そうだ〔＝軽薄〕と思った。呉章は後に王莽に殺された。（呉章の死体を）進んで引き取り葬儀をしようとした人はいなかった。弟子たちは皆名前を変え、他の師についた。曹敞はその時司徒掾だった。ただ一人呉章の弟子を名乗り、その死体を引き取り葬儀をした。（曹敞のような）公明な者は、世間の凡人たちに理解されるものではないと（私は）ちょうどその時知った。

二

家庭の教えはまた必ず朝廷の教えに由来する。朝廷の教えが道徳によって行われるならば、家庭の教えもまた道徳によって行われる。朝廷の教えが名誉と利益（を重んじる仕方）によって行われるならば、家庭の教えもまた名誉と利益（を重んじる仕方）によって行われる。以前友人がいて（私に）質問した、「建文の時どうして忠義の者が多いのか」と。私が言うことには、「朝廷の教えが厳格であったのだ」と。友人が質問した、「どうやってこれがわかるのか」と。（私が）言うことには、「これは父兄の教えによって、これがわかる。思うに当時の朝廷の教えは非常に厳格であった。その子弟がもし官職に就いて愚かならば、巻き添えは父母に及び、巻き添えは一族に及ぶ。だから幼児がもし愚かならば、その父兄は必ず怒りで顔色を変えてこれ（＝幼児）を教え導く。ことわざに言われている、『幼少期に培われた性質は生まれつき備わった性質のようなものであり、習慣（により身につけたもの）はもとから備わった性質のようなものである』と。積み重ねが非常に長いことは、官職に就いている時、もう命が助かりそうもない危険な状態になっても後悔しない理由である」と。

三

薛国の王の田嬰には子が四十数人いた。彼の身分の卑しい妾に子がいて、文と名付けた。文は五月五日に生まれた。田嬰が文の母に告げて言うことには、「取り上げること（＝育てること）をしてはならない」と。文の母はこっそりと取り上げて文を育てた。成長した時に、文の母は兄弟のとりなしで子の文を田嬰に謁見させた。田嬰は文の母を叱って言うことには、「私はおまえにこの子を捨てさせた。それなのに強引にこの子を生み育てたのは、どうしてか」と。文は（父に）拝礼して言うことには、「主君が五月生まれの子を取り上げない理由は、どういう理由ですか」と。田嬰が言うことには、「五月生まれの子は、（成長して）背丈が戸と等しくなったら、その両親に害をなそうとするものだ」と。文が言うことには、「人は、運命を天から受けるのか、それとも運命を戸から受けるのか」と。田嬰は黙っている。文が言うことには、「確かに運命を天から受けたなら、主君がどうして心配するのか、いや、しなくてよいでしょう。（もし人の）運命が戸口に左右されるものであれば、その戸を高くしさえすればよいのです。（戸をその都度高くしていけば）いったい誰が戸の高さに到達できましょうか」と。田嬰が言うことには、「子よ、（わかったので）やめてくれ」と。しばらく経って、田嬰はやっと文を礼遇し、家政をつかさどらせ賓客

の接待をさせた。賓客たちは日々（文の前に）進み出て、（文の）名声は諸侯に知られた。諸侯たちは皆使いに、田嬰に文を後継者とするようにお願いさせたところ、田嬰はそれを許可した。田嬰が亡くなって、やはり（文が）代わって薛国に王として即位した。これが孟嘗君である。